

読み手の段落意識と「文段」の構造

—— 米国ミドルベリー大学における日本語

談話分析シンポジウムでの討議から ——

佐久間 まゆみ

I はじめに

去る7月25・26日の両日、米国北東部の Vermont 州にある Middlebury College で、在米の日本人言語学者を中心とした、日本語の談話分析に関するシンポジウムが開催された。パネラーが全部で13名（研究発表者12名、助言者1名）、全米各地から集まった聴衆を含む全参加者が60余名に及ぶ盛況であった。

1970年代の米国一般言語学界における文章研究・談話分析に対する関心の高まりを背景とした、この時宜を得た企画は、トヨタ財団より研究助成金を受けられた、イリノイ大学の牧野成一氏の御尽力によって実現されたものである。また、牧野氏がここ数年来、夏期日本語学校の校長を兼任しておられる、ミドルベリー大学の共賛を得て、ニュー・イングランド地方でも有数の避暑地に位置する、緑豊かなキャンパスの一隅で、実施されたのであった。

かねてより国語学の文章論と、言語学の分野の談話分析（Discourse Analysis）やテキスト言語学（Text Linguistics）等との接点に関心があり、とくに英文の「パラグラフ（Paragraph）」と日本文の「段落」や「文段」の比較を研究テーマとする私にとっては、何よりの好機とばかり、大きな期待を抱いて、シンポジウム参加のお誘いに応じたのであった。その結果は、予想をはるかに上回る実り多いものであったと思う。

発表者は、各自、牧野氏より分担された課題（勿論、個人的な変更も大幅に認められたが）についての、英文の発表原稿を作り、提出することと、あらかじめ全員の原稿のコピーに目を通しておくことを課された。シンポジウム当日には、各人30分間の口頭発表と、その後約15分間の質疑応答・討論の機会が与えられた。一番最後に、助言者役のハーバード大学の久野暉氏から、全体的な発表に関する批判的総括が提出され、全体の討議が重ねられた。このほか、25日夕刻に、パネラーを中心とする晩餐会があり、また夜間には、参加者全員によるカクテル・パーティーが催されて、公式・非公式の形で熱心に意見の交換が行われ、充実した密度の濃いスケジュールの二日間であった。

発表者名と発表題目は、下記の通りである。

〔7月25日（土）〕

1. Noriko Akatsuka (UCLA), "Conditionals"

- ※2. John Hinds (Penn State U.), “ Paragraph structure in Japanese expository prose. ”
- ※3. Kazuko Inoue (I C U), “ A type of represented speech in Japanese and its function in a discourse. ”
- 4. Osamu Kamada (U. of Arizona), “ Viewpoint shift in indirect quotation : a case study from Japanese. ”
- ※5. Seiichi Makino (U. of Illinois), “ Tense switching in Japanese written narrative discourse. ”
- ※6. Naomi H. McGloin (U. of Wisconsin - Madison), “ Discourse functions of no desu. ”
- 7. Hiroshi Miyaji (Middlebury College), “ Connectives -- Language and logic. ”

[7月26日(日)]

- 8. Tazuko A. Monane (U. of Hawaii - Hilo), “ Discourse analysis in pedagogical perspective. ”
 - 9. Seiichi Nakada (Princeton U.), “ Questions and Answers in Japanese Discourse. ”
 - ※10. Mayumi Sakuma (Ochanomizu U. & U. of Tsukuba), “ The structure of the bundan in modern Japanese argumentative discourse : an analysis based on the readers' sense of paragraphing. ”
 - 11. Matsuo Soga (U. of British Columbia), “ Tense and aspect in conversations and narratives. ”
 - 12. Michio Tsutsui (U. of Illinois), “ Ellipsis of wa in Japanese. ”
 - 13. Susumu Kuno (Harvard U.), “ State of discourse analysis. ”
- (※印は、とくにパラグラフに関する指摘を含むもの。)

研究発表全体で取上げられたテーマは、書き言葉・話し言葉の両面にわたる種々の文章を用いた、小は助詞・助動詞の問題から、大はパラグラフや文体・論理・非言語コミュニケーションの問題に至る広範なものであったが、やはり中心的な課題は構文論レベルのテーマが占めていた。中にいくつか、同じテーマに関しての異なるアプローチの研究の組合せが生じたため、発表者相互、および参加者間で、何よりも本質的な議論をすることが可能であったのは、大きな収穫であった。

私の場合には、過去5年間にわたり、日米両国で調査を重ねてきた⁽¹⁾「読み手の段落意識」に関するデータの中から、日本語の論説文、「天声人語」の一文章についての、教員養成系大学生による資料に限定して、「文段」の構造と読み手の段落区分との相関

の問題を報告してみた。折しも、ペンシルバニア州立大学の John Hinds 氏が、同じく「天声人語」(原文・英訳文)を用いた読み手のパラグラフ区分の日米比較の実験結果を提出されていたこともあり、多くの方々から有意義で、鋭い御意見を伺うことができたのは、幸いだった。

シンポジウム全体の成果については、後日の出版計画が進行中なので、ここでは、私の主たる関心事である読み手の段落意識と論説文の「文段」の構造について、討論の成果をふまえつつ、整理検討してみたい。

Ⅱ 文章の主要成分をめぐって — パラグラフと段落・文段 —

1. 文よりも大きい単位

国語学の分野では、時枝誠記氏⁽²⁾による文法論の一部門としての「文章論」の提唱以来、最大にして、最も具体的な言語単位である「文章」を構成する主要成分、つまり文章の直接の構成要素は何か、という課題についての論議が重ねられてきた。この問題は文章構造の説明原理の解明にも連なり、また、文章論そのものの国語学中での位置付けを左右する重大なものであるため、安易な結論を導くことが難しく、今日なお検討中のものである。(これは、文章論が、修辞学や国語教育等と密接に関わる学問であることも一因している。)

文章の主要成分に関する議論の方向を大別してみると、1) 文によるものとする立場と、2) いわゆる「段落」のような、文と文章との中間にある言葉のまとまりを認める立場との二つになる。前者は、個々の文の連続・統一によって文章が成立つと考え、後者は、内容や論の展開の上でつながりのある文集合が一つの「段落」を形成し、さらにそれがいくつか集まって一篇の文章を構成するというとらえ方である。おそらく常識的には、文と段落の二段構えで文章の成分を考えるだろうが、個々の文章の長さが一定しないところから、中間にある段落の存在を一律に規定するのは難しいという指摘が出てくる。一方には、一文一段落のようなものもあり、他方、一段落一文もあり得るとなると、段落の規定のしかたは一層困難になってくる。先ほどの二つの立場⁽³⁾、このような概念規定の違いばかりではなく、文章構造を分析するための、現時点⁽³⁾における方法的な難易度を考慮するところから生じたと見なすこともできよう。

大勢としては、「文よりも大きい単位体」の存在を認めようとする方向で、文章構造の解明が進みつつある。ただし、具体的に何をもって、“中間的な言語単位”とするかという点で、さらに解釈の違いが見られる。

2. 段落と文段

「段落」という用語は、古く漢文作法等に由来し、後に西洋修辞学の「パラグラフ」

の訳語としての概念が加わったため、必ずしも今日、概念規定が一定していない。

市川孝氏⁽⁴⁾は、「段落は、一般に、①内容上、小主題によって統一されている、②形式上、改行一字下げによって示す、という二つの要素をもつ。」と規定しておられる。文章表現法の上では、この二要素の合致を重視する必要があるが、国語学一般の中に位置付けられる、文章研究の単位としては、改行の有無にかかわらず、「文章の内部の文集合（もしくは一文）が、内容上のまとまりとして、相対的に他と区分される部分」である「文段」を考えるべきだとされている。

この「段落」と「文段」の違いは、塚原鉄雄氏⁽⁵⁾の「修辭的段落」と「論理的段落」の区別に相当するという。前者は、「文章の筆者が設定する」「顕在的な」段落であり、後者は、「文章の読者が理解する」「潜在的な」段落であると規定される。また、両者の異同は、「表現の論理と構造の論理の異同であるといつてよい。」ようだ。そして、塚原氏は、この論理的段落を、国語の文法論的単位の一つとして認め、「文章の成分」としている。市川氏が、「文段」を文法論の対象とせず、意味把握のしかたと見るのに対して、塚原氏が、「論理的段落」を文法論の範疇で扱っている点が対立している。

さらに、永野賢氏⁽⁶⁾は、この両者の違いを「書き手の段落」と「読み手の段落」という観点から説明しておられるが、氏の構想される文法論的文章論で、文章の成分と見なすことができるのは、「書き手の段落」、つまり市川氏の「段落」概念のほうであるという。これはまた、塚原氏の「論理的段落」を文章の成分と見なす説にも対立する考え方である。

理論的には、塚原氏の見解が一番理解しやすいが、市川氏の指摘⁽⁷⁾しておられるように、塚原氏が「段落は一個の文で構成されるのが原則である」と見ている点には、文と段落の境界性から見て疑問が持たれる。もちろん特殊な強調の短い一文や、長大な一文から成る一文段もあるだろうが、原則としてはやはり二文以上の文集合が、文段であると考えほうがよい。また、文章論の立脚点を保障するには、文段が文法論の一単位として位置付けられるのが望ましい。文段が、純粋に意味内容の相対的なまとまりによる一区分であるならば、それは何らかの形で文法論的な特徴、つまり形態的指標を有するのではないかと予想される。これは、文段が重層構造をもつことを考慮するならば、その可能性は一層増すのではないかと、私は考えている。

ところで、「読み手の段落」は、言うまでもなく文段に近い性格のものであるが⁽⁸⁾、読み手（研究者も広い意味での理解主体である。）の存在は、複数なので、その間に生じる段落区分の認定の食違いや一致が問題になってくる。従来文章論における分析が、研究者個人の解釈にゆだねられていた感が強いのは、このずれの問題が等閑視されてきたためである。勿論、ある程度の読解力を身に付けた読み手の間では、細部は食違いにしても、やはり自ら最大公約数的な段落区分が認められるはずである。このような区分を文段として認定すればよい。もしくは、細部の一致度が低いところは、小さい文段、つまり低次元の層の文段の区分を示すのではないかという仮説を立てることも可能であ

るだろう。読み手が段落区分するかしないかを迷う箇所は、論や話題があまり変化しない、一つの文段の内部にある、より小さい文段の切れ目に当るのではないかと解釈される。

従来、修辞論や作文指導などの領域で、いわゆる改行のルール、段落を立てる基準といった問題に関しては、ある程度論じられてきた。日本語の文章の場合は、こうした規則も割合自由で、“自分流でやればよい”⁽⁹⁾と言われるほどである。その結果として、段落は表現技法の一つとして、文体論の領域⁽¹⁰⁾で処理されたりした。しかし、文法論としての文章論で文章の主要な成分とされる「文段」は、あくまでも仮説的なものなので、より多くの性質・構造の規定を引き出す必要がある。「読み手の段落意識」に関する調査は、この文段についての仮説を導くためのパイロット実験として、立案されたものである。

3. パラグラフと段落・文段

以上のような、国語学の文章論における段落と文段の概念の区別は、わが国では、翻訳文化としてのパラグラフの理論が日本語の文章に明治以降、急速に適用されたため、文章表現の実態との食い違いが生じたことに起因して、強く要請されるようになったようだ。さらにさかのぼれば、漢文作法の「段落」の用法が適用された経緯もあるから、近代日本語の文章が受けた変容は、測り知れないものがある。国語教育の現場では、「形式段落」と「意味段落」という二つの概念が区別されている⁽¹¹⁾。「意味段落」というのは、意味内容のまとまりの上から、いくつかの改行段落（形式段落）が集まってできるものである。これは、漢文では、「小段（落）」・「大段（落）」と呼ばれたものに当り、文段が、一つの段落の内部にも存在し、幾重にも包摂したり・されたりした構造を持つのに対し、必ず複数の段落の集合体の形をとり、大小二段構えの構造を持つ点で異なっている。

ところで、英文のパラグラフの概念では、あまりこの表記形式と意味内容のまとまりによる区分とのずれが問題にならないようである。もちろん英文の場合にも、いくつかのパラグラフが連合して一つのまとまりを形成する場合はあるわけで、この場合は、“paragraph sequences”⁽¹²⁾などと呼ばれている。米国でも、レトリックやコンポジション用語であったパラグラフが、言語学のDiscourseを構成する単位、あるいは文法的単位と見なされるようになったのは、近年のこと⁽¹³⁾である。しかし、この場合は、長い作文教育などの伝統に支えられて、概念規定の上ではあまり異和感を抱くこともなかったようである。この用語を使う人々は、レトリックなどでの規定を、そっくり持ち込んで、その延長線上に言語学としての分析を重ねる傾向がある⁽¹⁴⁾。これは、パラグラフという単位を、言語研究の領域に持込んだ何人もの研究者が、あまりこの語自体の概念規定を行っていないことによっても、裏付けられている。つまり、米国人にとって、この概念はわかりきった自明のものであり、表現の論理と理解の論理との乖離が、そう

大きくはないことを物語っている。

今回の研究で、まず第一に悩まされたのは、段落と文段の用語の区別を、英語でどう言い表すか、という点であった。“paragraph”と言ったのでは、当然両者を含めた概念になるため、段落を“the indented paragraph”、文段を“the grammatico-semantic paragraph”として区別してみた。“grammatico（文法的）”を加えたのは、前述の塚原氏の論理的段落に相当するものこそ、文法論における文章の主要成分たりうると考えたためである。この両者の区別を、“the paragraph as segmented by the author（書き手の段落）”と“the paragraph as perceived by the reader（読み手の段落）”とHinds⁽¹⁵⁾氏は言い替えておられるが、「文段」の場合は、あくまでも「読み手の段落」イコールではなく、近似的なものであることをお断りしておきたい。

この二語の区別は、英文におけるパラグラフの言語現象を説明する上でも有効であるようだ。Hinds氏論文⁽¹⁶⁾でも、この違いを、“the orthographic unit paragraph（表記法的単位のパラグラフ）”と“the structural unit paragraph（構造的単位のパラグラフ）”という用語で区別し、多くの先行研究が、いわゆる印刷上の改行を、構造的単位としてのパラグラフと一致させる誤ちを犯していることに注意を払っている。とくに、牧野成一氏の論⁽¹⁷⁾を引いて、書き手の段落が必ずある種の構造的特性をもつと見なす考え方と、原文のパラグラフと、読み手が主題の統一の細かさの段階に応じて区分したものととの食違いを、文章の表層構造と深層構造との間の分裂に因るものと見ることの誤りを指摘している。

また、Hinds氏は同じ箇所の註で、先の「段落」と「文段」の区別に言及し、これによっても「書き手がパラグラフのはじめを決める時に使う原理についての情報は何ら与えられていない」と指摘している⁽¹⁸⁾。書き手の段落区分原理についても言語研究の立場から検討を加える必要はあろうが、ここでは読み手の区分原理（実は書き手のものを追体験している）に焦点を当てて、文段との相関を論じるのが主眼である。

次の問題は、「天声人語」の文章中に見られる「▼」印を、段落、あるいはパラグラフの初めと見てよいかどうかという指摘である。改訂版「国語学大辞典」⁽¹⁹⁾の「段落」の解説には、¶とともに▼も、改行一字下げに相当する、段落符号として挙げてある。私の調査でも、いちおうこれを「段落」相当のものと見なして、論を進めた。Hinds氏⁽²⁰⁾も、▼印によって導かれる文集合を、一パラグラフ（a single paragraph）中の複数の小区分（subsections）と見るべきか、一文章（composition）の中の複数のパラグラフと見るべきかという疑問を呈している。原文は一行14字詰めなので、これに合わせた分量面の均衡を図ることが主なものだとも言う。この場合も、これを段落としてのまとまりと見ることは、文段と区別しておく限りは、何も問題あるまい。

Hinds氏⁽²¹⁾は、パラグラフの規模を、“paragraph”と“subparagraph”の二段階に分けて考えている。これは、「大段落」・「小段落」に相等するものだが、この

場合のパラグラフは、構造的単位の方なので、むしろ「(大)文段」・「小文段」という訳語を当てるべきかもしれぬ。しかし、文段を単に二つの次元のみの規模でみることは、あらゆる長さの文章を射程に入れて考えるとき、無理があるのではなからうか。

これに対して、Linda Jones 氏⁽²²⁾は、1次元からn次元までの重層構造をもつものとして、文章内部のいろいろな単位の中の主題 (theme) をとられている。Jones 氏によれば、「主題」とは、その文章中で、最も重要、あるいは主要な思想のことであるが、これは、より小さい単一のパラグラフの中にも存するものだという。最も高次の第一次主題 (“ the primary theme ”) は、文章全体の内容を示すもので、低次の第n次主題 (“ the n-ary theme ”) は、一つのパラグラフの内部にある文集合 (“ sentence clusters ”) の中にもあり得るとされる。Jones氏⁽²³⁾は、また文の場合には、「話題 (“ topic ”) 」として区別し、「主題」は、“ a topic plus a comment ” (話題に題述が加わった、命題的 [“ Propositional ”] なもの) であるから、原則としてパラグラフ以上の単位に存するものだと説いている。

Jones 氏の引用が長くなったが、これは次のような市川氏⁽²⁴⁾の文段の重層構造の把握に非常に近い見解だと言えよう。

いくつかの文が接続して一つの文段を作るためには、その文接続が、内容の上で、なんらかの連合をなしていなければならない。さらに、第一の文段と第二の文段とが連合して、より高次の文段を形作ることもあり、逆に、第一・第二の各文段の内部に、より低次の文段を内包することもある。

大小いくえもの包摂関係によって、文段が一つの文章を構成するという見地からは、このような多次元の重層構造を考えるのが適切であろう。Jones 氏の “ sentence clusters ” の規定は明確ではないが、第n次の主題を設定していることから、単一パラグラフのみならず、複数のパラグラフ連合 (「連文段」と称することにする。) をも視界に含めていることがわかる。これはHinds 氏の二次元のパラグラフ構造より、はるかに文章表現の実態に即したものだといえよう。文段のこのような構造の指摘は、すでに時枝誠記氏⁽²⁵⁾の論の中にもあり、文章論の早期における着想とともに、すぐれて日本語の構造の特質を反映した考え方だと評価することができる。

英文のパラグラフは、おそらく段落と文段の二面を含むものであるが、言語研究の領域で Discourse、あるいは Text の単位として設けられた場合は、文段に近いものとして考えられているのであろう。ただし、M.A.K. Halliday、および Ruqaiya Hasan 両氏⁽²⁶⁾のように、パラグラフを、意味論的なものと考え、文法論の範疇に含めない立場もあるが、これは Jones 氏の言うように、文中心に文章分析を試みていることに由来するものだと思う。

Ⅱ 読み手の段落意識と文段の構造

1. 読み手の段落意識調査

読み手と書き手、または読み手同志の段落意識の食違いを調べた研究は、少なからず段落区分の主観性・恣意性を指摘して、文章表現法的な扱いをするもので占められていた。ここでは、改行そのものが問題視されている。私の調査では、むしろ読み手の段落意識の一致度を手がかりとして、客観的に文段区分の重層構造を認定することを主たる目的としている。基本的な仮説として、読み手の段落区分の一致度が高い箇所は、内容や論の展開に大きな変化のある高次の文段の切れ目に当り、反対に一致度が低い（あるいは誰も指摘する人のない）箇所は、より低次の小さい文段の切れ目（あるいは文段内部の箇所）に当るという考え方をしてみた。

勿論、このような仮設が成立するには、文章の種類や長さ、また読み手の読解力や動機付けの仕方などを、十分に吟味するのも必要条件の一つである。今回の報告で取り上げたのは、朝日新聞の『天声人語』から「街の色」という論説文（“argumentative prose”⁽²⁷⁾）一編についての、二種の教員養成系大学の学生209人に⁽²⁸⁾よる、読解調査の結果である。原文の改行をすべて外した様式の文章を与えられた被調査者は、「①この文章の段落の切れ目と思われる箇所を印すこと。②「トピック・センテンス」⁽²⁹⁾がどれか、わかる時は、その部分にアンダーラインを引くこと。③、①と②の作業で、なぜその選択をしたか、理由がわかる場合は簡単に記すこと。」の解答を求められた。また、私大生163人に対しては、一般的な改行のルールについてもアンケートが出された。（これは、常識的な意味での段落区分原理を知るために、追加した項目である。

2. 読み手による段落区分の指摘

その結果、書き出しの1文を除く、全22文中、15文に段落区分の指摘がなされた。読み手の段落区分の一致度を、読み手全員に対して求めたところ、最高が67.9%で、最低が0.5%の指摘率の幅が生じた。便宜上、50%以上の指摘率の箇所をA段階の区分、30%以上をB段階、10%以上をC段階と、三段階に分けてみると、A段階が3つ、B段階が1つ、C段階が2つあり、残り9つは10%未満のものになった。原文は、全部で6つの段落から構成されているが、A段階では2つ、B段階は1つだけが原文の区分箇所と一致しており、原文の残り2つの切れ目は、いずれもD段階であった。このことから、原文と読み手の段落区分の食違いがまず明らかになる。一人当りの区分総数の上でも、原文と同じく6つに区切った人は、わずか2名で、区分箇所も原文とは違っていた。全体的に、4段、3段、5段、2段の順で区分総数が多かった。

原則として、段落区分の指摘率が高い文の前後には、指摘率が0か、D段階の低い文が位置するが、中に二か所だけ、二文続いて指摘率が比較的高い箇所がある。これは前の方の文が前後二つの段落のつなぎの役割を果たし、一文一段落として独立する可能性

の強い文であるためである。

ところで、Hinds 氏も「天声人語」の3種の文章について、原文で日本人大学生39人、英訳を用いて米国人の大学生・院生29人に、各段落・パラグラフの初めの文と文章構成のよしあしを五段階尺度で指摘させた結果を、報告されている。Hinds 氏も読み手の段落区分の一致度を百分率で示しておられるが、67%以上の指摘率の箇所は、パラグラフの区分箇所（“a paragraph boundary”）、34%から66%までの指摘率の箇所は、サブ・パラグラフの区分箇所（“a subparagraph boundary”）、さらに、33%以下は、区分のない箇所（“no boundary”）と解釈されている。ここには、前述した二段構えのパラグラフ観が示されているが、被験者の数からみても、この決定法は問題があると思う。まず、67%、33%の数値を導いた根拠が明らかでないが（私の場合は数値の大きさを便宜上レベル付けしたに過ぎないものである。）、果たして、33%以下は全くパラグラフの切れ目ではないと断言できるだろうか。また、日米ともに一律の基準で処理しうのだろうか⁽³⁰⁾。英訳を使うことの限界もあるが、この数値の解釈法は、とくに日本人のデータに関しては無理なのではあるまいか。被験者の集団の性格による揺れをも考慮する必要があるから、やはりこのような断定は避けるべきだと思われる。何よりも、低い指摘率の箇所は、パラグラフの切れ目に値しない誤りの指摘である、といった軌範意識（おそらく米国人の場合は、かなり確たる基準のようなものが共通にあるのだろうか。）は、言語研究と修辞学との混同を防ぐ上でも切り捨てる必要があると思われる。Hinds 氏の文章表現法的アプローチは、構成法の良し悪しを問題にしたり、文章作法の発言を基に日本語の文章構成の特色を論じたりしている点にも示されている。この点で、私の言語現象としての文段の実態を把握することが主眼であるアプローチとは、大いに異なるのではないかという気がする。

3. 読み手によるトピック・センテンスの指摘

次に、私の調査で、被調査者にTSを指摘させてみた結果は、この概念の流布がわが国の国語科教育ではあまり進んでいないにもかかわらず、教員志望者の集団であるためか、かなりの指摘率と一致が認められた。とくに国立大生46人の場合は、集団の規模が小さいせいもあるだろうが、全23文中15文だけをTSと指摘し、特に最後の一文は95.7%の指摘率であった。全体的にも、70%以上の箇所が2つ、20~40%台が3つ、10%台が3つで、残りは10%未満の低い指摘率であった。

このTSの指摘と、先の段落区分の指摘率の段階を組合わせてみたところ、比較的高い段落区分の前後（つまり段落の終わりと書き出しの部分）にTSの指摘者が多くなる傾向があった。とくに、この文章の場合は段落の最後の一文にTSが出てくる傾向があり、また、つなぎの役割を果たす一文一段落の箇所は、すべてTSの指摘率が高くなっていた。

このことは、読み手の段落区分とTSの出現箇所との間には何らかの相関があることを示唆しているようだ。一方、原文の段落との間にはTSとの相関はあまり明確に表れていな

い。つまり、内容本位のまとまりである文段、あるいは読み手の段落区分のほうが、T Sの配置に敏感な傾向があることが、この文章の場合、また日本語の論説文では言えるようだ。これに対して、英文のパラグラフでは、コンポジションの教科書類をはじめ、言語研究の上でも、パラグラフの第一文(書き出し文)にT Sの出現率が圧倒的に多いと広く言及されている⁽⁶¹⁾。

4. 読み手の段落区分原理と文段

最後に、読み手のコメントにおける段落の改行のルールであるが、全部で380集まった解答の内訳は、以下の通りであった。

主な区分原理	総数	(%)
1) 内容のまとまり	196	52%
2) 論の展開 表現意図	82	22%
3) 文法的特徴	75	20%
4) 長さ・分量	14	4%
5) 直観的印象	13	3%
計 (140人)	380	100%

1)の「内容のまとまり」というのは、素材内容の変化、話題の変化、場面の变化、意味の変化、時の推移などを含むものである。2)の「論の展開・表現意図」というのは、例示とか、論の結び・初めなどを含む、論理的な展開をもたらす表現によるものである。3)の「文法的特徴」の中では、「接続語句」などの表現を挙げたものが多く、文末表現や、代名詞、助詞の「が」や「は」の働きの指摘も若干は見られた。長さや分量の均衡、また直観的印象といったものが、読み手の段落意識を左右しているのも、見落せない事実である。

以上の理由は、読み手が自分を書き手として想定してあげたものだから、一面では書き手の段落区分原理を示していると見ることもできる。おそらく、表現する場合と、他人の表現したものを読解する場合とでは、これらの原理の働く傾向に差異があるのだと思われる。とくに、「天声人語」の筆者などは、内容や論理的展開の面よりも、限られた一行14字(現在は活字が大きくなったため、13字)詰の紙面への配置の工夫、つまり長さに対する意識が相当強いようだ。読み手の方はむしろ内容本位にまとまりを識別する意識が働くため、両者の段落区分に食違いが生ずるのであろう。言語研究の立場では、書き手と読み手の双方を視野に入れた分析をすることが、必要なは言うまでもあるまい。

今回の報告では、先の読み手の段落区分の指摘率の高低の分布が、主に内容のまとま

りと論理的展開（表現意図）の変化の程度によって生じる、文段の重層構造を反映するものだという仮説を立て、とくに素材の内容（subject matter）の重層構造・話題の分布（topical distribution）・その他の文法的形態（指示語・接続語句・省略の用法）・表現意図（communicative intent）の重層構造・陳述の連鎖（proposition series）などの項目の分析をした結果と、読み手の段落区分の指摘率の分布とを照合してみた。その結果、両者の間にかかなりの相関関係が認められた。先の種々の分析項目は、大半文章論における文章構造の分析の観点として、先学諸氏により提示されたものであるが、おそらく仮説的単位である文段の構造とも密接に関わる、一種の文法形態的な指標となる可能性の高いものだと考えられる。従って、読み手の読解力が十分に高い集団⁽⁶²⁾による、段落区分の指摘率の高低の分布状態は、文段の重層構造と非常に密接な関係をもつと見なすことができる。

国語学の文章論研究では、従来、「段落としてのまとまりを示すところの客観的基準を明確に定めることが困難である⁽⁶³⁾」ため、これを文法論の範囲内で考察の対象となし得るかどうかは問題である、という見方が定説であったが、これはあくまで改行を目印とする段落を対象とするからであって、内容本位の文段を扱う場合には、むしろ文法形態面での特質を見出すことも、全く不可能ではないという見通しが立つ。

IV おわりに

最後に、段落区分の文法形態的特質に関して、今回のシンポジウムで、指摘されたことも含めて、若干述べてみたい。

日本語の段落と違って、英文のパラグラフの場合には、牧野成一氏⁽⁶⁴⁾も指摘しておられるように、単に「話題の統一」のみならず、「文法的統括の原理」があると指摘する人が、比較的多い。ここで「文法的統括」というのは、Hallidayらのいう“cohesion”⁽⁶⁵⁾のことであるが、たとえば、「①照応（anaphora）を機能とする（指示）代名詞、省略、冠詞（日本語なら助詞の「は」と「が」）、②接続詞、③主語、直接目的語、間接目的語といった文法関係の選択（特に主語の統一）、④語順⁽⁶⁶⁾」などがその種の項目とされている。これらの項目中、特に①と②は、日本語の文章論でも「文脈展開の形態⁽⁶⁷⁾」として注目されているものである。前述した私の読み手の段落区分の分析にも共通するものが多く含まれている。

今回の討議の中でも、パラグラフの区分の指標となる文法形態の指摘が、多くの方々から提出された。

①「のだ・のである・のです」は、パラグラフの終りの位置に置かれる傾向がある。
（井上和子⁽⁶⁸⁾・Naomi H. McGloin氏）

②過去形の助動詞「た」は、物語文（written narrative discourse）のバラ

グラフの最初の一文に置かれる傾向がある。また、時制の変換は、パラグラフ間で行われることが多い。(牧野成一氏⁽³⁹⁾)

③助詞の「は」を伴った名詞句 (a noun phrase) が、表記法上のパラグラフの最初にあるときは、その動きは前方照応 (anaphoric) ではない。

(John Hinds 氏⁽⁴⁰⁾)

以上の発言は、すべて日本語の文章の、改行一字下げによる段落についてのものである。このほかにも、一つの段落の内部で、代名詞化や名詞の省略や反復が行われる傾向がある点なども言及されたが、日本語の文章の場合、とくに改行のルールなども十分に一定したものとなっていない現在までの文章に関して、これらの文法的形態を直ちに段落の形態的特質と見ることは、やや無理ではないかと思う。

私自身、過去に新聞社説⁽⁴¹⁾やコラムの段落について、接続語句や文末表現の形態、指示語などの文法的形態の出現傾向を調査し、その結果、ある種の文法形態が段落の内部よりは、段落区分箇所——一段落の最初に位置する文に出現する傾向の高いことを確かめたが、これは、あくまでも一つの傾向であって、決定的な形態的指標と言い切れるものではなかった。この二種のジャンルの文章例では、確かに、「た」止めの文は段落の初めに、「のだ」止めの文は段落の内部に多く出現する傾向はあったが、他のジャンルの文章や種々の機能の段落については、そうした傾向が認められるかどうか、疑問が持たれる。たとえば、全文末の80%以上が過去形の「た」止めの小説などでは、②のような段落区分との関連は付けにくいであろう。「のだ」止めの文も、段落の初めに来るものもあれば、一段落内に複数の「のです」が使われる文章例もある。やはり段落ではなく、文段と文法的統括の原理との相関を問題にすべきではないかと思われる。

英文のパラグラフの場合には、内容上のまとまりと改行一角分引込めの形式 (indentation , indentation) との間の食違いがあまり大きくないせいか、文法的統括の原理などはより厳密に働くようである。Hinds 氏⁽⁴²⁾も日本語のパラグラフ構造の文法的あらわれは弱く、暗示的であることを指摘しておられる。英文のパラグラフと日本語の段落との差異については、いろいろ論じられているが、これが林四郎氏⁽⁴³⁾の指摘されるように、「言語教育の方法の違い」によるものなのか、あるいは「もっと深い所に原因がある」ものなのか、非常に興味深い問題だと思う。これは、さらに日米の異文化間コミュニケーションの問題や、東西のレトリックや思考様式の異同などにも及ぶ、比較文化的見地からも、重要な課題だと言えるのではなからうか。後日、稿を改めて考察してみたい。

- 注1. 佐久間まゆみ 1978 「現代アメリカ人のパラグラフ意識」(『人間文化研究』2 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科)参照。なお、この調査は、お茶の水女子大学大学院博士課程における主要研究課題として、1976～1980年の間に数回にわたり、日米両国で実施されたものである。調査に御協力いただいた本当に大勢の方々に感謝申し上げたい。
- 注2. 時枝誠記 ①1950 『日本文法・口語篇』(岩波書店)、②1960 『文章研究序説』(山田書院)
- 注3. 宮地裕 1976 「1 日本語の文法単位体」(『岩波講座・日本語』6、岩波書店)P.27に「現状では、文と文との連結体について、とくに三文までの推論の構成について、着実な研究を積むことが必要であり、いきなり段落や文章の構成に及ぶことはできない段階にあると思われる。」という指摘が見える。
- 注4. 松村明(編) 1971 『日本文法大辞典』(明治書院)P.471「段落」の項参照。
- 注5. 塚原鉄雄 1966 「論理的段落と修辭的段落」(『表現研究』4、表現学会)
- 注6. 永野賢 ①1969 『悪文の自己診断と治療の実際』(至文堂)、②1972 『文章論詳説』(朝倉書院)P.77～83
- 注7. 市川孝 1978 『国語教育のための文章論概説』(教育出版)P.124～154
- 注8. 注6② P.83に「右のような『段落』と『文段』との区別は、前項に述べたわたしの考え方によれば、『文章の段落』と『読者の段落』に相当すると解してもよいように思われる。」という記述がある。(傍点、私附す。)
- 注9. 注6② P.162に「結局、文章を書くときには、自分自身の考えて段落を立てればよいのである。」と文章表現論の立場での指摘がある。
- 注10. 樺島忠夫 1974 「現代作家の句読法——表記と文体とのかかわりについて」(『言語生活』277、筑摩書房)
- 注11. 倉沢栄吉 1959 『文法指導』(朝倉書店)
- 注12. Christensen, Fransis. 1967 Notes Toward a New Rhetoric. Harper & Row.: New York.
- 注13. Makino, Seiichi. 1979 “Paragraph is it a legitimate linguistic unit — A case study from English and Japanese.” Rhetoric 78, ed. by R. Brown, Jr. et al. Center for Advanced Study in Language: Minneapolis, P. 283～96
- 注14. Jones, Linda K. 1977 Theme in English Expository Discourse. Jupiter Press. P. 1

- 注15. Hinds , John. 1981 “ Paragraph structure in Japanese expository prose ” Paper presented at the Middlebury Symposium on Japanese Discourse Analysis , July 25 - 6 , 1981. Middlebury , VT. P. 27
- 注16. 注15 P. 4~5
- 注17. 牧野成一 1978 『ことばと空間』(東海大学出版会) P. 107~173
- 注18. 注15 P. 27
- 注19. 国語学会(編) 1980 『国語学大辞典』(東京堂出版) P. 592~593「段落」の項参照。
- 注20. 注15 P. 14
- 注21. 注15に同じ。
- 注22. 注14 P. 9, P. 38
- 注23. 注14 P. 142
- 注24. 市川 孝 1963 「文章論」(『国語シリーズ57・文章表現の問題』文部省) P. 30
- 注25. 注2⑥ P. 72~76
- 注26. Halliday , M.A.K. and Hasan , Ruqaiya. 1976 Cohesion in English. Longman : London.
- 注27. 注15 Hinds 氏は、「天声人語」を、“ expository prose ”とされている。
- 注28. 国立東京学芸大学の永野賢氏と、私立文教大学の高崎みどり氏に、調査に御協力いただいた。今回は学芸大生46人、文教大生163人のデータを使用した。
- 注29. “ topicsentence ” (以下、すべてTSと称する。)の訳語として「中心文・主題文・話題文・小主題文」などを挙げて、指示した。
- 注30. 私の調査では、平均的に米国人の場合の方が日本人よりも指摘率の数値が10%ぐらい高い傾向がある。注1参照。
- 注31. 注14および注15参照。
- 注32. 私の調査では、国内の高校生二校、大学生三校のデータの中で、今回の集団(とくに学芸大生の場合)の読解力が一番高いように思われた。
- 注33. 金岡 孝 1960 「3、段落」(『口語文法講座6・用語解説篇』、明治書院) P. 31~32
- 注34. 注17 P. 134
- 注35. 注26参照。“ cohesion ”の訳語は、「凝集・結束性・統括」などがある。

- 注36. 注17 P.110
- 注37. 市川 孝 1973 「国語教育のための文章論」(教育出版) P.23～53
- 注38. シンポジウム研究発表題目3・6、井上和子・Naomi H. McGloin 両氏の論文。および井上氏の御指摘にある、次の論文を参照。霜崎實 1981 「『ノ DEAL』における結束性の研究」『言語研究』79) P.130～132
- 注39. シンポジウム研究発表題目5、牧野誠一氏論文。
- 注40. 注15 P.11～12
- 注41. 佐久間まゆみ 1974 「新聞社説における段落区分の形態的特質について」(『国文』40、お茶の水女子大学国語文学会)
- 注42. 注15 P.15
- 注43. 注17 P.171に、日本語の文章については、「段落意識があいまいである。」、英語の文章については、「段落意識が明確である。」という指摘がある。
- 外山滋比古 1973 『日本語の論理』(中央公論社)
- 注44. 林 四郎 1959 「文章の構成」(㊤『言語生活』93・㊦『言語表現の構造』 1974、明治書院 ㊧P.218～219

(お茶の水女子大学大学院博士課程・筑波大学非常勤講師)